

## PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 08-003150

(43)Date of publication of application : 09.01.1996

(51)Int.Cl. C07D271/10  
 C07D413/14  
 C07D413/14  
 C07D413/14  
 C07D413/14  
 C07D413/14  
 H05B 33/14  
 H05B 33/26  
 // C09K 11/06  
 (C07D413/14  
 C07D271:10 )  
 C07D333:10 )  
 (C07D413/14  
 C07D213:16 )  
 C07D271:10 )  
 (C07D413/14  
 C07D209:32 )  
 C07D271:10 )  
 (C07D413/14  
 C07D215:04 )  
 C07D271:10 )  
 (C07D413/14  
 C07D271:10 )  
 C07D307:79 )

(21)Application number : 06-158078

(71)Applicant : RICOH CO LTD

(22)Date of filing : 16.06.1994

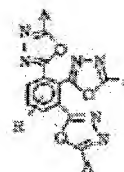
(72)Inventor : NAGAI KAZUKIYO  
 ADACHI CHIHAYA  
 TAMOTO NOZOMI

## (54) OXADIAZOLE COMPOUND AND ITS PRODUCTION

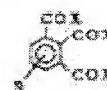
## (57)Abstract:

PURPOSE: To obtain a new compound having stable film-producing property as a material for organic electroluminescent elements, especially useful as a luminous material, an electron transporting material, etc., and having long-term storage stability.

CONSTITUTION: This compound of formula I [A is a (substituted)aromatic or an (substituted)aromatic heterocycle; R is H, a halogen, a (substituted)alkyl, an (substituted)alkoxy or hydroxyl] is obtained by reacting an acid halide compound of formula II (X is a halogen) with a tetrazole compound of formula III or formula IV. Furthermore, the acid halide compound is synthesized by treating a carboxylic acid compound of formula V with a halogenating agent such as thionyl chloride or phosphorus pentachloride.



I



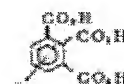
II



III



IV



V

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平8-3150

(43) 公開日 平成8年(1996)1月9日

(51) Int.Cl. <sup>6</sup>	識別記号	庁内整理番号	F I	技術表示箇所
C 0 7 D 271/10				
413/14	2 0 9			
	2 1 3			
	2 1 5			
	3 0 7			

審査請求 未請求 請求項の数 2 F D (全 10 頁) 最終頁に続く

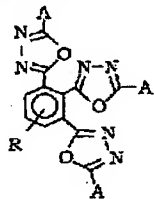
(21) 出願番号	特願平6-158078	(71) 出願人	000006747 株式会社リコー 東京都大田区中馬込1丁目3番6号
(22) 出願日	平成6年(1994)6月16日	(72) 発明者	永井 一清 東京都大田区中馬込1丁目3番6号 株式 会社リコー内
		(72) 発明者	安達 千波矢 東京都大田区中馬込1丁目3番6号 株式 会社リコー内
		(72) 発明者	田元 望 東京都大田区中馬込1丁目3番6号 株式 会社リコー内
		(74) 代理人	弁理士 池浦 敏明 (外1名)

(54) 【発明の名称】 オキサジアゾール化合物およびその製造方法

(57) 【要約】 (修正有)

【目的】 経時安定性に優れ、高信頼性有機電界発光用材料、特に電子輸送材料として有用であり、しかも良好な薄膜形成が可能な、新規オキサジアゾール化合物、及びその製造方法を提供する。

【構成】 一般式 (I) で表されるオキサジアゾール化合物および、酸ハライド化合物とテトラゾール化合物とを反応させることより成る、当該オキサジアゾール化合物を製造する方法。



... (I)

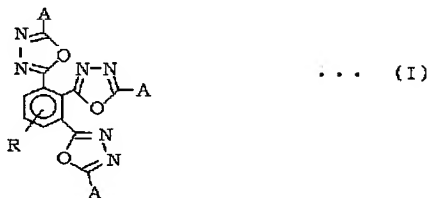
〔式中、Aは芳香族炭化水素基もしくは芳香族複素環基を表し；Rは水素原子、ハロゲン原子、アルキル基、アルコキシ基、ヒドロキシル基を表す〕

1

## 【特許請求の範囲】

【請求項1】 下記一般式 (I) (化1) で表されるオキサジアゾール化合物。

## 【化1】



(式中、Aは、各々置換もしくは無置換の芳香族炭化水素基、置換もしくは無置換の芳香族複素環基を表し、それぞれ同じでも異なっても良い。又、Rは、水素原子、ハロゲン原子、置換もしくは無置換のアルキル基、置換もしくは無置換のアルコキシ基、ヒドロキシル基を表し、それぞれ同じでも異なっても良い。)

【請求項2】 下記一般式 (II) (化2)

## 【化2】



(式中、Rは、水素原子、ハロゲン原子、置換もしくは無置換のアルキル基、置換もしくは無置換のアルコキシ基、ヒドロキシル基を表す。Xはハロゲン原子を表す。) で表される酸ハライド化合物を、下記一般式 (I) (化3) あるいは一般式 (IV) (化4)

## 【化3】

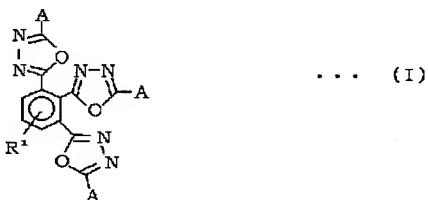


## 【化4】



(式中、Aは、各々置換もしくは無置換の芳香族炭化水素基、置換もしくは無置換の芳香族複素環基を表す。) で表されるテトラゾール化合物とを反応させて下記一般式 (I) (化1)

## 【化1】



(式中、Aは、各々置換もしくは無置換の芳香族炭化水素基、置換もしくは無置換の芳香族複素環基を表し、それぞれ同じでも異なっても良い。又、Rは、水素原子、ハロゲン原子、置換もしくは無置換のアルキル基、置換もしくは無置換のアルコキシ基、ヒドロキシル基を表し、それぞれ同じでも異なっても良い。) で表さ

2

れるオキサジアゾール化合物を製造することを特徴とするオキサジアゾール化合物の製造方法。

## 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【産業上の利用分野】 本発明は、蛍光増白剤として、あるいは有機電界発光素子用材料、特に電子輸送材料として有用な、新規オキサジアゾール化合物、及びその製造方法に関する。

## 【0002】

- 10 【従来の技術】 有機電界発光素子用の材料として種々のオキサジアゾール化合物が知られている。例えば、日本化学会誌、1991、(11)、p. 1540-1548には発光材料及び電子輸送材料としてオキサジアゾール化合物を使用した例が記載されている。また、特開平3-205479号公報、特開平4-212286号公報、特開平4-363891号公報、特開平4-363894号公報にもオキサジアゾール化合物を使用した例が記載されている。しかしながら、未だに薄膜の安定性に問題があり、高輝度、高信頼性の有機電界発光素子は得られていない。

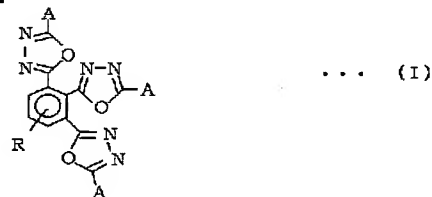
## 【0003】

【発明が解決しようとする課題】 本発明は、有機電界発光素子用の材料として、安定した製膜性を有し、特に発光材料、電子輸送材料等として有用であり、しかも長期保存によっても変質しにくい新規オキサジアゾール化合物およびその製造方法を提供することを目的とする。

## 【0004】

- 30 【課題を解決するための手段】 本発明者らは、前記課題を解決するため鋭意検討した結果、ある特定の構造を有するオキサジアゾール化合物が有効であることを見出し、本発明を完成するに至った。すなわち、本発明によれば、下記一般式 (I) (化1) で表わされるオキサジアゾール化合物が提供される。

## 【化1】



40

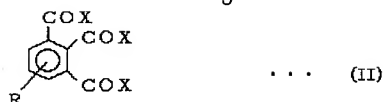
(式中、Aは、各々置換もしくは無置換の芳香族炭化水素基、置換もしくは無置換の芳香族複素環基を表し、それぞれ同じでも異なっても良い。又、Rは、水素原子、ハロゲン原子、置換もしくは無置換のアルキル基、置換もしくは無置換のアルコキシ基、ヒドロキシル基を表す。)

また、下記一般式 (II) (化2)

## 【化2】

50

3



(式中、Rは、水素原子、ハロゲン原子、置換もしくは無置換のアルキル基、置換もしくは無置換のアルコキシ基、ヒドロキシル基を表す。Xはハロゲン原子を表す。) で表される酸ハライド化合物を、下記一般式 (II) (化3) あるいは一般式 (IV) (化4)

【化3】



【化4】



(式中、Aは、各々置換もしくは無置換の芳香族炭化水素基、置換もしくは無置換の芳香族複素環基を表す。) で表されるテトラゾール化合物とを反応させて前記一般式 (I) (化1) で表されるオキサジアゾール化合物を製造することを特徴とするオキサジアゾール化合物の製造方法が提供される。

【0005】前記一般式 (I) において、Aにおける芳香族炭化水素基あるいは芳香族複素環基の具体例としては、スチリル、フェニル、ビフェニル、ターフェニル、ナフチル、アントリル、アセナフテニル、フルオレニル、フェナントリル、インデニル、ピレニル、ピリジル、ピリミジル、フラニル、ピロニル、チオフェニル、キノリル、ベンゾフラニル、ベンゾチオフェニル、インドリル、カルバゾリル、ベンゾオキサゾリル、キノキサリル、ベンゾイミダゾリル、ピラゾリル、ジベンゾフラニル、ジベンゾチオフェニル、オキサゾリル、オキサジアゾリル基等が挙げられる。

【0006】これらの芳香族炭化水素基あるいは芳香族複素環基は更に一つ以上のハロゲン原子、水酸基、シアノ基、ニトロ基、アミノ基、トリフルオロメチル基、炭素数1から12、好ましくは1から6のアルキル基、炭素数1から12、好ましくは1から6のアルコキシ基、アリールオキシ基、フェニル基、スチリル基、ナフチル基、チオフェニル基、アラルキル基、ビフェニル基、ビチオフェニル基、フラニル基、ビフラニル基、ピロニル基、ビピロニル基、等の置換基を有していてもよい。

【0007】また、前記一般式 (I) において、Rにおける置換もしくは無置換のアルキル基としては、炭素数1~12、好ましくは1~6のアルキル基が挙げられ、その置換基としては、ハロゲン原子、水酸基、フェニル基、アルコキシ基又はアミノ基等が挙げられる。置換もしくは無置換のアルコキシ基としては、炭素数1~12、好ましくは1~6のアルコキシ基が挙げられ、その置換基としては、ハロゲン原子、水酸基、アミノ基等が挙げられる。

4

【0008】一般式 (I) で表される本発明のオキサジアゾール化合物は、前記した如く、下記一般式 (II) (化2)

【化2】



(式中、R及びXは前記に同じ。) で表される酸ハライド化合物を、下記一般式 (III) (化3) あるいは一般式 (IV) (化4)

【化3】



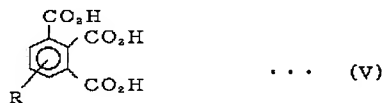
【化4】



(式中、Aは、前記に同じ。) で表されるテトラゾール化合物とを反応させることにより得られる。

【0009】一般式 (II) (化2) で表される酸ハライド化合物は、下記一般式 (V) (化5)

【化5】



(式中、Rは前記に同じ。) で表されるカルボン酸化合物を塩化チオニル、五塩化リン、ホスゲン、塩化アルミニウム等のハロゲン化剤で処理することにより合成される。

【0010】一般式 (III) (化3) 及び一般式 (IV) (化4) のテトラゾール化合物は互変異性の関係にあって互に変化しやすく、別々に取り出すことが困難なものであり、両者が混在したものであるのが一般的であり、本発明でも混在したものを使用できる。ここで使用される一般式 (III) (化3) 及び一般式 (IV) (化4) で表されるテトラゾール化合物は従来公知の方法で製造される。例えば、Synthesis 71 (1973) に記載の方法で合成できる。

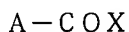
【0011】また、一般式 (II) (化2) で表される酸ハライドと一般式 (III) (化3) 及び一般式 (IV) (化4) で表されるテトラゾール化合物との反応は、R. D. Huisgenらのオキサジアゾール合成法に準じて行われる。例えば、Angew. Chem., 72, 366 (1960), Chem. Ber., 93, 2106 (1960), Tetrahedron, 11, 241 (1960), Chem. Ber., 98, 2966 (1965) に記載の方法を適用することができる。

【0012】反応はテトラゾール基とハロゲン塩化カルボニル基との反応であり、一般式 (II) (化2) で表される化合物と一般式 (III) (化3) 及び一般式 (IV)

(化4)で表される化合物の前記官能基が交換された原料からも一般式(I)(化1)で表されるオキサジアゾール化合物を合成することができる。すなわち下記一般式(VI)(化6)で表されるテトラゾール化合物と一般式(VII)(化7)との反応によっても一般式(I)

(化1)で表されるオキサジアゾール化合物を合成することができる。

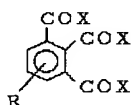
【化6】



(式中、Aは前記に同じ。Xはハロゲン原子を表す。)

【0013】また、一般式(I)(化1)で表されるオキサジアゾール化合物は次の反応によっても合成することができる。すなわち、下記一般式(II)(化2)

【化2】

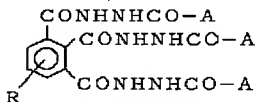


... (II)



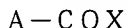
(式中、Aは前記に同じ。)で表される化合物とを反応させて、下記一般式(IX)(化9)

【化9】



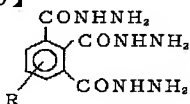
... (IX)

(式中、A、Rは前記に同じ。)で表される化合物を製★



(式中、A、Xは前記に同じ。)で表される化合物と、下記一般式(X)(化10)

【化10】



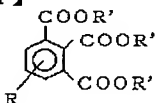
... (X)

(式中、Rは前記に同じ。)で表される化合物とを反応させて、前記一般式(IX)(化9)で表される化合物を製造し、さらに脱水反応を行うことにより、前記一般式(I)(化1)で表されるオキサジアゾール化合物を製造することができる。

【0015】出発原料として使用される一般式(X)

(化10)で表される化合物は下記一般式(XI)(化11)

【化11】

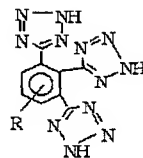


... (XI)

(式中、Rは前記に同じ、R'はアルキル基を表す。)で表されるエステル誘導体と、ヒドラジンとの反応により容易に製造することができる。

【0016】前記一般式(IX)(化9)で表される化合物の前記2種の合成工程は通常塩基性触媒の存在下で行なわれる。塩基性触媒としては、ピリジン、及びその誘

\*



... (VI)

(式中、Rは前記に同じ。)

【化7】

... (VII)

10※ (式中、Rは前記に同じ。)で表される酸ハライド化合物と、下記一般式(VIII)(化8)の化合物

【化8】

... (VIII)

★造し、さらに脱水反応を行うことにより、前記一般式(I)(化1)で表されるオキサジアゾール化合物を製造することができる。

【0014】更にまた、一般式(I)(化1)で表されるオキサジアゾール化合物は、下記一般式(VII)(化7)

【化7】

... (VII)

導体、トリエチルアミン、トリブチルアミン、トリエタノールアミン、キノリン、ピペラジン、モルホリンなどの有機塩基あるいは水酸化ナトリウム、水酸化カリウム、炭酸ナトリウムなどの無機塩基が挙げられるが、特に有機の塩基性触媒が好ましい。該工程の反応溶媒としては前記一般式(IX)(化9)で表される化合物を少しでも溶解するものであればすべてのものが使用できるが、エタノール、ブタノール等のアルコール系溶媒、ジオキサン、テトラヒドロフラン等のエーテル系溶媒、ベンゼン、トルエン、クロルベンゼン、ニトロベンゼン等の芳香族系溶媒、N、N-ジメチルホルムアミド、ジメチルスルホキシド等が好ましい。又、前記したピリジン等の有機の塩基性触媒を過剰に用い、溶媒としても良い。

【0017】また、前記一般式(IX)(化9)で表される化合物を脱水反応させ、閉環させる工程は、オキシ塩化リン、塩化チオニル、ポリリン酸、ホウ酸、トルエンスルホン酸等の脱水剤の存在下に行なう。この時の反応溶媒としては前記工程で示した溶媒が使用できるが、クロルベンゼン、ジクロルベンゼン、キシレン、ニトロベンゼン等の芳香族系溶媒、トリクロルエタン、トリクロルメタン等のハロゲン系溶媒等が特に好ましい。脱水剤の使用量は出発原料化合物1モルに対して1モルから10モル程度が適切であるが、例えば、オキシ塩化リンを

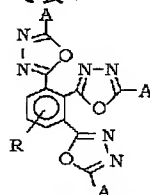
大過剰に用い、溶媒としても良い。通常、反応は、50℃から300℃で数分から10時間で完了する。

\*されるオキサジアゾール化合物の具体例を表1に示す。

【0019】

【0018】本発明に係わる一般式(I) (化1) で表\*

【表1-(1)】



R=水素原子の場合

No.	A	No.	A	No.	A
1		10		19	
2		11		20	
3		12		21	
4		13		22	
5		14		23	
6		15		24	
7		16		25	
8		17		26	
9		18		27	

【0020】

【表1-(2)】

9		10	
No.	A	No.	A
28		40	
29		41	
30		42	
31		43	
32		44	
33		45	
34		46	
35		47	
36		48	
37		49	
38		50	
39			

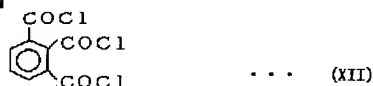
【0021】本発明の一般式 (I) で示されるオキサジアゾール化合物は、有機電界発光素子の構成成分として特に優れており、例えば、真空蒸着法、溶液塗布法等により薄膜化し、陽極及び陰極で直接または間接的に挟持することにより素子を得ることができる。

【0022】

【実施例】以下、本発明を実施例に基づいて更に詳細に説明する。尚、本発明はこれら実施例により限定されるものではない。

【0023】合成例1 下記構造式 (化12) で表される化合物の合成〔一般式 (II), R=H、X=Cl〕

【化12】



1, 2, 3-ベンゼントリカルボン酸の水和物を10gと五塩化リン44gを反応容器に入れ、90℃で15分間加熱した後150℃で7時間反応させた。その後、オキシ塩化リンを蒸留により取り除き、ジクロルメタン40mlを加えて析出物を濾過により取り出し、ヘキサン

300mlで洗浄して粗生成物8.23g (収率76.3%)を得た。これをシクロヘキサン105mlで再結晶し、無色針状晶の目的生成物6.79 (収率63.0%)を得た。この化合物の融点は117.5℃~118.5℃であった。

【0024】合成例2 下記構造式 (化13) で表される化合物の合成〔一般式 (III), A=ビフェニル-4-イル〕

【化13】



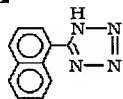
p-シアノビフェニル20.0gとアジ化ソーダ7.98gと塩化アンモニウム6.57gを反応容器に入れ、溶媒としてN,N-ジメチルホルムアミドを55mlに加え、100℃~110℃にて15時間加熱還流した。放冷後、水500mlに反応物を注ぎ、濾過し、水500mlで水洗を行い、粗生成物24.0g (収率96.8%)を得た。これをジオキサン650mlにて再結晶を行い、9.94g (収率40.1%)の白色粉末物を得た。この化合物の分解点は239.5℃~240.3℃

11

であった。赤外線吸収スペクトルは、 $3200\text{ cm}^{-1}$  ~  $2500\text{ cm}^{-1}$  にかけてテトラゾールのN-H伸縮振動に帰属されるブロードなピークが観察され、目的物であることを確認した。

【0025】合成例3 下記構造式(化14)で表される化合物の合成〔一般式(III), A=1-ナフチル〕

【化14】



.....(XIV)

$\alpha$ -ナフトニトリル30gとアジ化ソーダ14.01gと塩化アンモニウム11.52gを反応容器に入れ、溶媒としてN,N-ジメチルホルムアミド82mlを加え、 $100^\circ\text{C}$ ~ $110^\circ\text{C}$ にて24時間加熱還流した。その後、エバポレータで溶媒を除き、水450mlを加え、塩酸でpH=1とした後濾過、水洗して粗生成物34.95gを得た。これをジオキサンとトルエンの混合溶媒で再結晶し、さらにメタノールと水で再沈殿を行い、白色粉末状の目的生成物25.97gを得た(収率67.6%)。この化合物の分解点は $215.0^\circ\text{C}$ ~ $215.6^\circ\text{C}$ であった。

【0026】合成例4 化合物No. 1の合成〔一般式(I) A=フェニル, R=H〕

合成例1で得られた酸クロリド化合物2.65g(0.01mol)と5-フェニル-テトラゾール化合物4.38g(0.03mol)を反応容器に入れ、モレキュラシーブで脱水処理したピリジン60mlを溶媒として加え、24時間加熱還流した。放冷後、水800mlに反応物をあけ、析出物を濾過、乾燥し、粗生成物2.06gを得た。その後、カラムクロマトグラフ(展開溶媒 $\text{CHCl}_3$ 、THF=30:1)で精製し、さらに、トルエン80mlで再結晶を行ない目的生成物0.85gを得た。この化合物の融点は $243.0^\circ\text{C}$ ~ $244.5^\circ\text{C}$ であった。赤外線吸収スペクトル(KBr錠剤法)を図1に示す。

【0027】

【表1】

元素分析値( $\text{C}_{30}\text{H}_{15}\text{N}_6\text{O}_3$ として計算)

	C (%)	H (%)	N (%)
実測値	71.00	3.58	16.44
計算値	70.58	3.55	16.46

【0028】合成例5 化合物No. 22の合成〔一般式(I) A=1-ナフチル, R=H〕

合成例1で得られた酸クロリド化合物1.0gと合成例3で得られたテトラゾール化合物2.44g反応容器に入れ、モレキュラシーブで脱水処理したピリジン30

12

mlを溶媒として加え、20時間加熱還流した。放冷後、メタノール70mlを加え析出物をろ過、メタノール洗浄して粗生成物2.6gを得た。その後N,N-ジメチルホルムアミドで2回再結晶し、無色針状晶の目的生成物1.03g(収率41.4%)を得た。この化合物の融点は $279.6^\circ\text{C}$ ~ $280.1^\circ\text{C}$ であった。赤外線吸収スペクトル(KBr錠剤法)を図2に示す。

【0029】

【表2】

元素分析値( $\text{C}_{42}\text{H}_{24}\text{N}_6\text{O}_3$ として計算)

	C (%)	H (%)	N (%)
実測値	76.60	3.54	12.82
計算値	76.35	3.66	12.72

【0030】合成例6 化合物No. 26の合成〔一般式(I) A=4-ピフェニルイル, R=H〕

合成例1で得られた酸クロリド化合物1.0gと合成例2で得られたテトラゾール化合物2.77gを反応容器に入れ、モレキュラシーブで脱水処理したピリジン30mlを溶媒として加え、53時間加熱還流した。放冷後、メタノール70mlを加え析出物をろ過、メタノール洗浄して粗生成物1.71gを得た。その後、ジオキサンとトルエンの混合溶媒で再結晶し、さらにクロロホルムとTHFの混合溶媒で煮沸洗浄し、さらにジオキサン溶媒で再結晶して目的生成物0.67g(収率24.1%)を得た。この化合物の融点は $287.0^\circ\text{C}$ ~ $287.8^\circ\text{C}$ であった。赤外線吸収スペクトル(KBr錠剤法)を図3に示す。

【0031】

【表3】

元素分析値( $\text{C}_{48}\text{H}_{30}\text{N}_6\text{O}_3$ として計算)

	C (%)	H (%)	N (%)
実測値	78.40	4.03	11.35
計算値	78.04	4.09	11.38

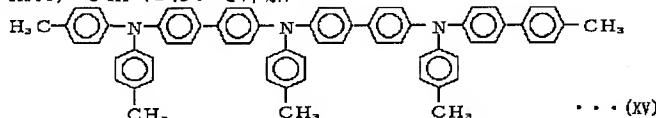
【0032】

【応用例1】ガラス基板上に大きさ $2\text{ mm} \times 2\text{ mm}$ 、厚さ $1700\text{ nm}$ の酸化錫インジウム(ITO)による陽極を形成し、その上に下記式(XV)(化15)で示されるジアミン誘導体からなるホール輸送層 $40\text{ nm}$ 、下記式(XVI)(化16)で示されるジアミン誘導体からなる発光層 $15\text{ nm}$ 、前記化合物No. 1からなる電子輸送層 $20\text{ nm}$ 、下記式(XVII)(化17)で示される電子輸送層 $30\text{ nm}$ 、10:1原子比のMgAg電極を3

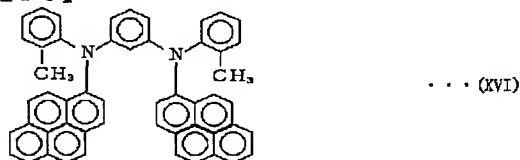


13

00 nm、各々真空蒸着により形成し、電界発光素子を作製した。蒸着時の真空度は $0.7 \times 10^{-6}$  Torrであり、基板温度は室温である。このようにして作製した素子の陽極及び陰極にリード線を介して直流電源を接続したところ、電流密度 $200 \text{ mA/cm}^2$ において印加 \*



## 【化16】



## 【化17】



## 【0033】応用例2

前記化合物No. 1の代りに化合物No. 22する以外は応用例1と同様にして電界発光素子を作製した。作製した素子の陽極及び陰極にリード線を介して直流電源を接続したところ、電流密度 $460 \text{ mA/cm}^2$ において印加電圧が13 Vであり、輝度 $2300 \text{ cd/m}^2$ の青色の発光が観察された。又、初期輝度 $125 \text{ cd/m}^2$ 、 $30 \text{ mA/cm}^2$ の定電流条件で連続駆動したところ、輝度半減時間は100時間以上であった。なお、この素子は3ヶ月保存後においても明瞭に発光が確認された。

## 【0034】応用例3

前記化合物No. 1の代わりに化合物No. 26を使用する以外は応用例1と同様にして電界発光素子を作製した。作製した素子の陽極及び陰極にリード線を介して直流電源を接続したところ印加電圧が12 Vで電流密度が $500 \text{ mA/cm}^2$ で輝度が $2200 \text{ cd/m}^2$ の青色発光が観察された。なお、この素子は3ヶ月保存後においても明瞭な発光が確認された。

14

\* 電圧が11.5 Vであり、輝度 $2250 \text{ cd/m}^2$ の青色の発光が観測された。なお、この素子は3ヶ月保存後においても明瞭に発光が確認された。

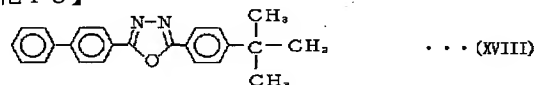
## 【化15】

## 10 【0035】比較例

前記化合物No. 1の代わりに下記化合物 (XVIII)

(化18)を用いた以外は応用例1と同様にEL素子を作製した。この素子に直流電圧を印加したところ、明瞭な青緑色の発光が認められた。しかし、1ヶ月保存後においては、EL発光は認められなかった。

## 【化18】



## 20 【0036】

【発明の効果】本発明のオキサジアゾール化合物は新規化合物であって、蒸着等によって容易に均質な透明膜を形成することができ、有機電界発光素子用の電子輸送材料としての優れた機能も備えており、且つ経時での変質が少ないので高信頼性有機電界発光用材料として有用である。また、本発明により、該オキサジアゾール化合物の有利な製造法を提供することができる。

## 【図面の簡単な説明】

【図1】本発明のオキサジアゾール化合物〔一般式

(I)においてA=フェニル、R=H)の赤外線吸収スペクトル図 (KBr錠剤法)である。

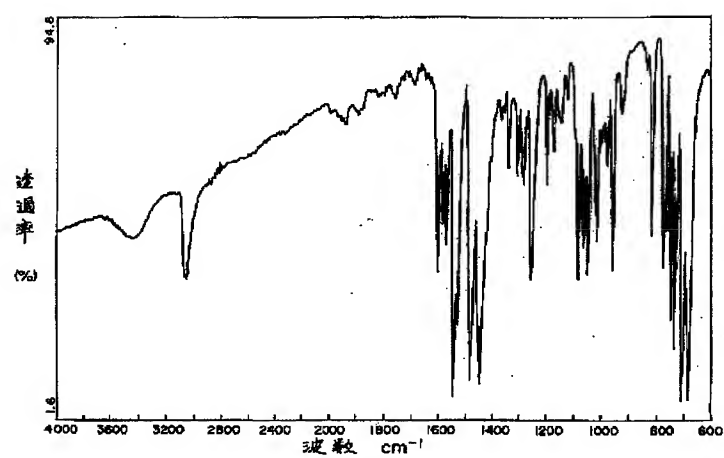
【図2】本発明のオキサジアゾール化合物〔一般式

(I)においてA=1-ナフチル、R=H)の赤外線吸収スペクトル図 (KBr錠剤法)である。

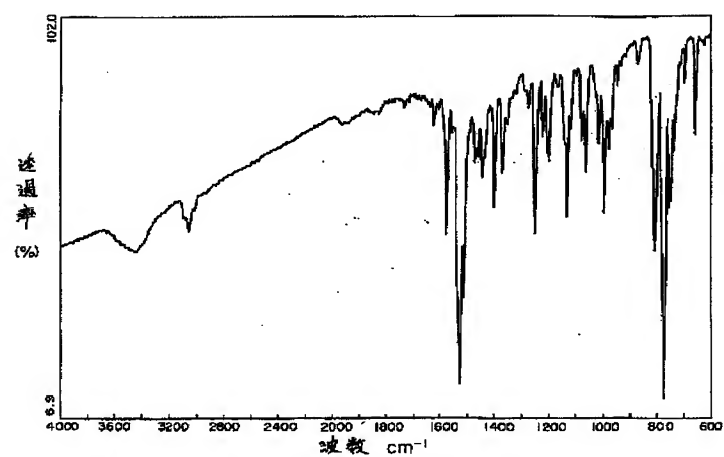
【図3】本発明のオキサジアゾール化合物〔一般式

(I)においてA=4-ビフェニル、R=H)の赤外線吸収スペクトル図 (KBr錠剤法)である。

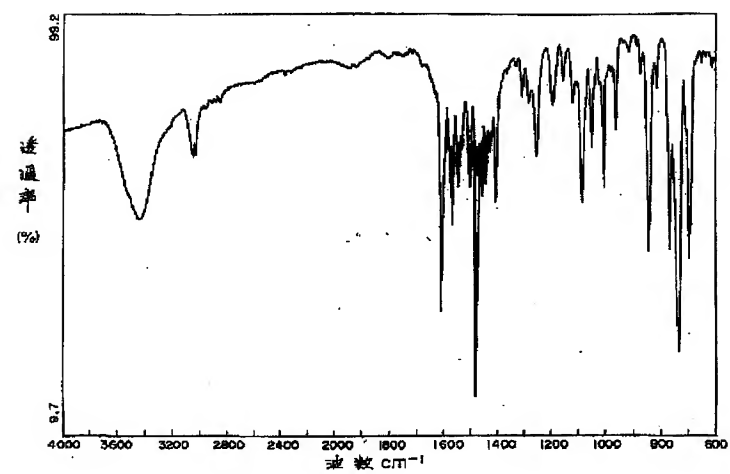
【図1】



【図2】



【図3】



## フロントページの続き

(51)Int.Cl. <sup>6</sup>	識別記号	庁内整理番号	F I	技術表示箇所
C 0 7 D 413/14	3 3 3			
H 0 5 B 33/14				
33/26				
// C 0 9 K 11/06		Z 9280-4H		
(C 0 7 D 413/14				
271:10				
333:10)				
(C 0 7 D 413/14				
213:16				
271:10)				
(C 0 7 D 413/14				
209:32				
271:10)				
(C 0 7 D 413/14				
215:04				
271:10)				
(C 0 7 D 413/14				
271:10				
307:79)				